島嶼学概論 II レポート

～鹿児島県中之島～

鹿児島大学　農学研究科　修士課程 1 年
学籍番号：3413810121　園田真一郎

2013/01/31

1. はじめに

鹿児島県十島村は屋久島と奄美大島の間に点在する７つの有人島と５つの無人島で構成されており、トカラ列島と呼ばれている。今回講義の一環として訪れた中之島は、この十島村の中で面積および人口ともに最大の島である。そのため島内には役場の支所が置かれ、村の中心的な役割を担っている。島内は、標高 979mと全国の島で４番目の高さを誇る山、御岳がそびえ、また鹿児島県天然記念物に指定されているトカラ馬の放牧はこの島の特色であり印象強い。

今回の講義では、座学だけでは知り得ない内容を自分に吸収すること、そして島の振興のために何ができて、何が必要か考えることを目的とした。中之島では、「I ターン者としての島の生活」や「島の畜産」、「島の医療」に関する講義を受け、さらに島を車で回りながら地理・歴史・生活を体験し、また、行政・教育・農業・文化活動などについて島の方々の話を聴くことができた。本レポートでは、中之島で体験し知り得た内容と共に、十島村の今後に向けた考えについて述べていく。

2. 中之島を訪れて

十島村歴史民俗資料館ではトカラ列島の歴史や文化を学ぶことができた。生態系や文化は各島で異なる一方で、島と島との人間関係は強いというギャップがとても印象に残った。また、島の生命線とも言える定期船の発達により島民の暮らしが向上したという歴史から、改めて交通アクセスの整備の大切さを感じた。

診療所では、島の医療体系を学ぶことができた。医師の巡回は月に 2 回ほどであり、また看護師は医師の指示以上の処置を施せない現状があり大変だと思った。このため病気の予防を促進していく必要がある。運動不足や食生活における野菜不足のために生活習慣病の患者が増加している問題に関しては、例えば地域行事にウォーキングを取り入れたり、島での食育指導をより積極的に行ったりすることが有効ではないだろうか。

3. 島の将来に向けて

島の将来を築くキーワードとして、「島への定住化」、「持続可能な産業の発展」の 2 つを挙げたい。なぜなら、島の産業や暮らしを支える基盤となるのはやはり「人」であり、労働人口の確保が必要だからである。また、その産業や暮らしの仕組みは持続可能でなければ意味がない。

まず、「島の定住化」の実現のために必要なのは、島の雇用を増やすことだ。現在十島村では、既に株式会社山口水産と連携した事業が進んでおり、雇用が拡大してきている。こ

うした島と民間企業が協調的な事業を進める方針を続けていくべきだと思う。また、本土から島への新規就業者が参入しやすい環境をつくることも重要だ。今回、実際にIターンされている古橋先生の講義の中で特に印象に残ったのは、I ターンを希望する人が、「食べていけるか」という点に関して不安をもっているということだ。よって、この不安を取り除いていくために、島で学びながら働けるような現地研修制度を確立していくのがよいと思った。

続いて「持続可能な産業の発展」の実現のために力を入れるべき産業は、漁業および農業だと考える。一般に、多くの離島においては第一次産業がベースとなり、他の産業が成り立っている。中之島を含め、十島村の各島においても漁業や農業・畜産の底上げにより、島にさらなる活気を与えられると思う。具体的な方法としては、水産物資源を枯渇させない海の保全活動を続けていくことだ。なぜなら中之島では海のしけが多く、養殖業への開拓にうまく踏み切れず、主に天然の水産物資源に頼らざるを得ない状況ではないかと思うからである。講義ではシバの木の一部を海に沈めてコウイカの産卵場所を確保する写真を見せていただいた。このような保全活動は今後も続けていくべきだと思う。

農業・畜産に関しては、広大な未開拓地があるものの、島では農業従事者、畜産従事者の数は少ないのが現状だ。よって生産方法にこだわりをもって農作物の質を上げたり、ブランド化により付加価値をつけることが効果的であると思う。

4. おわりに

海や自然が好きだという人は多く、また近年人口の都市集中や社会の閉塞感から、島に住みたいという人は増加しているように思える。島への定住化がうまく達成されれば今後、島のさまざまな問題解決の糸口になり得ると期待する。これまで 1 泊 2 日の中之島現地調査学習での経験をもとに、稚拙ではあるが私の考えを述べてきた。もっと中之島の特性や島民の暮らしを十分に知ることが私には必要であると感じた。今回、島と真剣に向き合う貴重な機会をつくっていただいた国際島嶼教育研究センターの先生方、平泉先生、古橋先生、手塚先生、中之島の住民の皆様に深く感謝の意を表したい。